

## 活動内容報告書

<b>団体名</b>		特定非営利活動法人メッシュ・サポート	
直 近 3 か 月 活 動 報 告	2022年 10月 1-31日	ヘリ活動 計21件＝現場救急15件・転院搬送6件	
	2022年 11月 1-30日	ヘリ活動 計14件＝現場救急8件・転院搬送6件	
	2022年 12月 1-31日	ヘリ活動 計28件＝現場救急14件・転院搬送13件・災害救助1件（コロナ対応医師派遣）	

2007年6月13日～2022年12月31日までの累計活動件数は2343件（ヘリ2004件・飛行機339件）

活動風景の写真などを添付してください



今帰仁村からの現場救急要請を受け出動（名護市内ヘリポート）

**コメント**

■ 沖縄本島北部医療用ヘリ活動

沖縄緊急時において15分以内の初期治療の可否が救命率に大きく左右します。ドクターヘリは15分以内に医師が現場に駆け付け、救命治療を行える体制構築を目標としています。沖縄県のドクターヘリは浦添市に配備されており、かつ、沖縄県本島の最北端の救命病院は名護市となります。北部救急救助ヘリの運営により、北部地域の救命活動に取り組んでいます。

■ 琉球諸島医療用飛行機活動

沖縄県では1972年の日本復帰以降、陸上自衛隊および海上保安庁への災害派遣要請による離島急患搬送が開始され、2008年に沖縄県本島にドクターヘリが導入されましたが、先島・大東諸島からの長距離離島における迅速な搬送体制の構築は未だ沖縄県の命題であり、また感染症患者の搬送や、身体的に公的交通手段では帰島できないなどの離島特有の問題も介在しています。改善策として、飛行機を活用した琉球諸島全域の医療支援に取り組んでいます。2022年3月に機体借用時の事故にて機体が消失したため、現在は再開に向け機体購入費の組成に努めています。

## 活動内容報告書

<b>団体名</b>		特定非営利活動法人メッシュ・サポート	
直 近 3 か 月 の 活 動 報 告	2022年 4月 1-30日	ヘリ活動 計17件＝現場救急10件・転院搬送7件	
	2022年 5月 1-31日	ヘリ活動 計28件＝現場救急22件・転院搬送6件	
	2022年 6月 1-30日	ヘリ活動 計19件＝現場救急8件・転院搬送9件・災害救助2件（コロナ対応医師派遣）	

2007年6月13日～2022年6月30日までの累計活動件数は2235件（ヘリ1896件・飛行機339件）

活動風景の写真などを添付してください



伊平屋島へのコロナ感染対策に伴う応援医派遣（名護市内ヘリポート）

### コメント

■ 沖縄本島北部医療用ヘリ活動

沖縄緊急時において15分以内の初期治療の可否が救命率に大きく左右します。ドクターヘリは15分以内に医師が現場に駆け付け、救命治療を行える体制構築を目標としています。沖縄県のドクターヘリは浦添市に配備されており、かつ、沖縄県本島の最北端の救命病院は名護市となります。北部救急救助ヘリの運営により、北部地域の救命活動に取り組んでいます。

■ 琉球諸島医療用飛行機活動

沖縄県では1972年の日本復帰以降、陸上自衛隊および海上保安庁への災害派遣要請による離島急患搬送が開始され、2008年に沖縄県本島にドクターヘリが導入されましたが、先島・大東諸島からの長距離離島における迅速な搬送体制の構築は未だ沖縄県の命題であり、また感染症患者の搬送や、身体的に公的交通手段では帰島できないなどの離島特有の問題も介在しています。改善策として、飛行機を活用した琉球諸島全域の医療支援に取り組んでいます。2022年3月に機体借用時の事故にて機体が消失したため、現在は再開に向け機体購入費の組成に努めています。



メッシュ・サポートは離島・僻地における医療格差の改善を図るため、多くの方々からの支援を財源に航空機を用いた離島医療支援活動に取り組むNPO法人です。ヘリ及び飛行機の累計活動件数は2,343件（2007年6月16日～2022年12月31日時点）

# 救える命を救いたい

# MESH

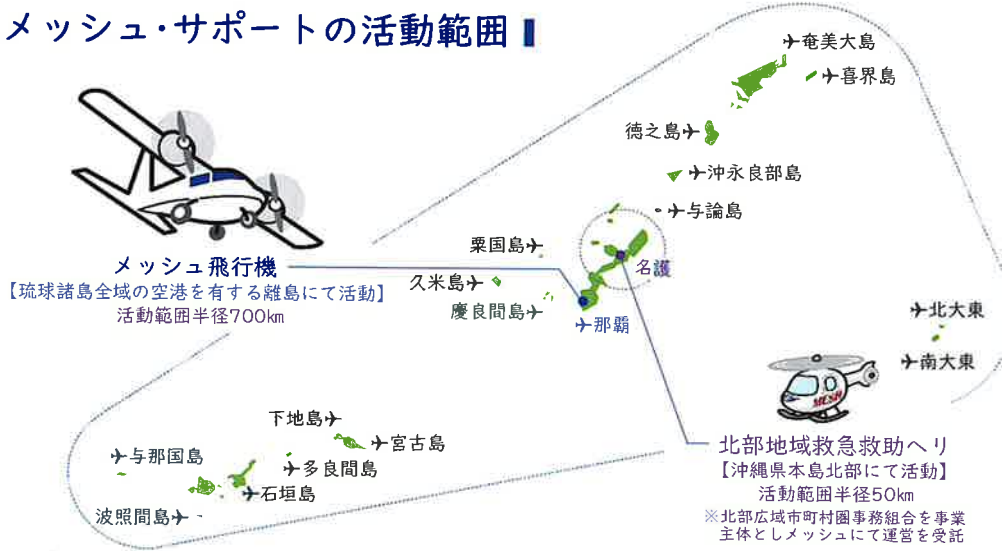
活動開始から **15** 年

3 すべての人に健康と福祉を

11 住み続けられるまちづくりを

17 パートナースHIPで目標を達成しよう

## メッシュ・サポートの活動範囲



琉球新報2022年8月29日掲載記事抜粋

## メッシュ小型機休止続く

【北部】NPO法人メッシュ・サポート（塚本裕樹理事長）の小型飛行機が伊江島空港に墜落した事故から5カ月余り、離島から沖縄本島の病院への転院搬送や帰島の搬送を担ってきた小型機が失われ、運用休止が続いている。メッシュは再開を目指しているが、円安の影響で後継機の入手が難しく、再開のめどは立っていない。



沖縄本島に搬送された患者が転院など治療を継続するため離島に戻る際、民間機やフェリーを使うと移動中の医療機材の使用に制限があるほか、移動に時間がかかるため患者の費用面や体調面の負担が大きい。メッシュは2015年度以降、小型機1機で宮古・八重山を含めた県内離島や奄美群島から沖縄本島への転院搬送、帰島時の搬送など、県のドクターヘリや自衛隊機が対応できない事業を引き受けてきた。

しかし、3月12日の事故で全事業を休止した。受託してきた北部振興事業による北部地域救急・救助ヘリ「やんばるレスキューヘリ」は4月に再開したが、小型機の搬送事業は休止が続く。後継の小型機を探しているものの、国内では確保が難しいという。円安の影響で輸入価格が上昇しており、海外の中古品でも手頃な機材が見つかっていない。小型機の運営は寄付金で全額を賄っているため、後継機の選定に頭を抱えている。事故後も小型機利用のニーズは絶えることがないという。今月28日までには沖永良部島などの病院から本島への転

## 帰島、転院、離島搬送に痛手

院搬送2件、本島から宮古島への帰島搬送1件、本島から喜界島への帰島搬送1件の依頼があったが、断らざるを得ない状況だ。

やんばるレスキューヘリがカバーするのは北部圏域で、その他の離島や奄美は対象外。北部の事業でも基本的に急患に限られる。メッシュの小型機は、患者やその家族のさまざまな事情や多様な要望に応じた搬送に当たってきたが、利用できないことで患者側の負担が増すことになる。

沖永良部徳洲会病院では、脳の病気で沖縄本島に搬送された患者の帰島時、家族を迎えに出向きフェリーで帰った。患者の安全性を保つ意味でも本来は早くして医療環境が整ったメッシュに搬送を依頼していたケースだという。

玉榮副院長は「搬送で困った時に対応してくれるメッシュは、なくてはならない存在だ」と強調し、早期再開を願う。塚本理事長は「公的搬送がカバーできない島々の課題解消を目指している。少しでも早く再開し、離島の皆さんのために働きたい」と話した。（岩切美穂）

メッシュ飛行機活動再開に向け応援の程宜しくお願い致します

### 指定口座

琉球銀行	金城支店(普)	364285
沖縄銀行	田原支店(普)	1692738
海邦銀行	高良支店(普)	0585924
沖縄県協	小禄支店(普)	0074198
ゆうちょ銀行		01770-5-135567
沖縄労働金庫	おろまち支店(普)	3424901

※口座名義は「メッシュ・サポート」



特定非営利活動法人メッシュ・サポート

〒901-0145 沖縄県那覇市高良3-3-17コーポナガミネ202  
TEL 098-858-2539 E-mail info@meshsupport.net



2022年メッシュ・サポートの活動および救命活動継続のためのご支援のお願いについて

2022年3月に当法人飛行機の操縦士採用訓練中に起きた事故により、多くの方々にご迷惑をお掛けし深謝申し上げます。再発防止に努め、長距離離島の搬送を必要とする方々のため再開に向け奔走しております。また沖縄本島北部地域の救急ヘリは205件（2022年1～12月）の救命活動に貢献しました。当法人の活動は皆様の誠意に支えられています。離島・僻地の救命活動継続のため、今後とも応援願います。

# 医療過疎地の「命」救う

沖縄タイムス 2022年7月27日掲載記事



沖縄出身の両親のもと、大阪で

一本気な情熱家。それが豊快な関西弁と共に、多くの人の記憶に刻まれた人柄だろう。NPO法人メッシュ・サポートの生みの親で、腎臓などの持病悪化で2018年1月に他界した小濱正博さん（享年63）。

網の目を意味するメッシュのよう  
 うに、医療過疎地の患者を幅広く  
 救いたい。固い決意を具現化し、本  
 島北部や離島をカバーする民間救  
 急救助ヘリを飛び立たせて今年で  
 15年。後を継ぎ、理事長になった塚  
 本裕樹さん（47）は「小濱先生の思  
 いを終わりにできない。同じ方向  
 を目指せるスタッフや応援してく  
 れる多くの方々のおかげでここ  
 までやってこられた」と実感する。

## 救急ヘリ 仲間が継ぐ志

救急救助ヘリの前で写真におさまる塚本裕樹理事長（前  
 列左から3人目）と玉城佑一郎理事（同左からメッシュ  
 ・サポートのスタッフ）4月（提供）



今後について語る塚本理事長＝5月、那覇市



ダイビングで溺れた女性を救急救助ヘリから運ぶメッシュ・サポートの小濱正博さん（右）ら＝2008年7月、名護市宇茂佐のヘリポート

生まれた「沖縄2世」。大阪や東京で救急医や心臓血管外科医として働く最先端の現場から、地域医療を志し37歳で伊江村立診療所へ赴任したことが、メッシュを立ち上げる原動力になった。

生前「忘れられない体験」と明かしたのは、島の米軍基地内の耕作地で軽トラが横転し、運転も「自分のできる最大の努力はし



た」との思いが湧き上がり「一つの疑問がこだまするようになってきた」と自著に記す。「なぜ米軍ヘリのスタッフは迅速に現場に来て患者を搬送できるのか。なぜ海軍病院の救急スタッフはあんなに組織だった無敵の動きができるのか。日本ではできないのか。命に格差はないはずだ」

1996年、家族を伴って渡米。海域救急に必要な重症や刺創症の治療、そして航空機医療を学んだ。

2007年6月の救急ヘリの運航開始から、メッシュは運営主体の卒業撤退や行政の厳しい助成条件の壁に阻まれ「安定飛行」に恵まれなかった。それならば仲間たちと街頭で寄付を呼びかけ、年間約1億円の資金や人員確保などに奔走。「空飛ぶ救急車」の存続を諦めなかった。

12年にメッシュの事務局長に就いた塚本さんは、元々は1級建築士として東京・渋谷で設計や不動産コンサルタントを手がける会社に勤務。リゾートホテル開発の担当で沖縄滞在中の07年末、知人を介し小濱さんと出会った。メッシュの広報物をボランティアで制作したのを機に活動へ加わり、3年余で正式なスタッフに。「小濱先生ほど無理難題に挑む人物に接したことがなく、いつの間にか引き込まれていた」

小濱理博の購入を促し、クラウドファンディングへの協力を呼びかけた小濱さん。持病の悪化で入道断念をしながら活動していた2012年6月（提供）

理事を務める医師の玉城佑一郎さん（51）も、小濱さんの信念に共鳴した人。呼吸器内科から救急診療に転身してメッシュのヘリに乗るようになり「医療の早期介入が、患者の予後を大きく左右する。地域に不可欠な存在だと身をもって感じた」とうなずく。

救急ヘリとは別に、小濱さんが中心となり7年前に導入した小型飛行機が今年3月、伊江島空港で墜落・炎上した。乗員2人が犠牲となる痛ましい事故に、ヘリの一時運休も余儀なくされたが、塚本さんは表情を引き締めて言う。北部地域や離島の医療格差が解消されない限り、私たちの存在意義は消えない。

ヘリは20年10月以降、北部広域市町村圏事務組合からの運営委託を受け運航する。一方の小形飛行機事業は、今後とも国土交通省運輸安全委員会の事故報告書を読み、再発防止の徹底や新たな機体調達などに取り組む方針。治療を終えた患者を島に帰す帰島搬送や医師搬送といった、行政では賄えない役割への期待は大きい。

「諦めずに続けることで道は開ける」と信じ、塚本さんらメンバーは前へ進む。「わしらがやらんバで、誰かやるんや」。何より、そのハっぱをかける関西弁が、幾度となく職員によみがえり背中を押す。（デジタル編集部・新垣綾子）

◇ 第4水曜日に掲載

「生きると紡いだ皆さんの体験や記事への感想をお寄せください。」  
 メール: raris@shokuna.watimes.co.jp

紙面編集: 知念清強

下記の指定口座よりご支援頂けたら幸いです。

■琉球銀行 金城支店(普) 364285	■沖縄銀行 田原支店(普) 1692738
■海邦銀行 高良支店(普) 0585924	■沖縄県農協 小禄支店(普) 0074198
■ゆうちょ銀行 01770-5-135567	■沖縄労働金庫 おろまち支店(普) 3424901

※口座名義は「メッシュ・サポート」

※認定NPO法人等寄附金特別控除制度は2016年4月15日にて終了しております。